

林文子先生を偲んで

林文子さんのこと

若栗 尚

本来ならば、林文子先生と書くのが本当だと思うが、私や弟の林先生に対する感情はもっと身近な‘姉さん’といったものなので、礼を失していることは十分承知のうえで、あえて、林さんと書かせて頂くことにする。

私達兄弟が林さんを父のまわりの女医さん達の中からはっきりと意識したのは、父の亡くなった日からのように思う。その日に早速、家のほうに来て下さって、玄関のところで、母の手をとって、長い間じっと立ち尽くしておられたのを見て、この人は、シャキシャキとした気の強そうな人に見えるけど、細かい気遣いのできる暖かい人なのだと感じた。その後、私は体をこわし、高校3年の後半を休み、卒業試験を受けて何とか卒業はしたものの、1年間、受験を延ばさざるをえなくなった。この頃から、忙しい毎日であられたのに時間を割いて、よく母のところへ来られては、なんとなく、暗くなりがちな母や私達兄弟の気持を引き立てて下さっていた。

これは、その後、私達兄弟が進学して東京と大阪にゆき、母を、ひとり、父の生家の寺の境内にあった独立した家屋に残していた時期にも続き、林さんが来られた翌日には、母から電話があり、種々な話を聞かされることがよくあった。

なにか相談をしかけると、こちらの意向を正確に汲み取って、殆ど、直感的とも思える早さで返事をしてくださるのだが、決して自分の考えを押しつけるのではなく、選択のできる形で助言をして下さっていた。しかし、後で考えると殆どの場合が林さんの考えられた方向になっている事に気付くことが多かった。あれは、特技とでも言えるものであった。

林さんは、他人の面倒はよくみるが、自分は他人に迷惑をかけない人で、病気が悪化してからのことなどを伺っても、普段と同じように先の先まで考えて段取りをつけておられたように思える。自分には厳しいが他人には寛大な人だったので、それに私達が甘えて、迷惑の掛けっぱなしで過ごして来たことが今更のように悔やまれる。今後も林さんが私達の心の中に生き続け、力になって下さることを願って、筆を置かせて頂く事にする。

(空港環境整備協会・航空環境研究センター・騒音振動部長)